

季刊

じぱ

Japan Intellectual Property Association

Special INTERVIEW

小野 洋太 氏 特許庁長官

JIPA通信

第 24 回 JIPA 知財シンポジウム告知



「北の大空の王者」 photo by 富田 千晶 氏



Special INTERVIEW No.022

特許庁はJIPAと連携して、 特許制度の見直しと知財経営の底上げによる イノベーションの好循環を目指す

小野 洋太氏 Yota ONO (写真左)

特許庁長官

山中 昭利 Akitoshi YAMANAKA (写真右)

日本知的財産協会 理事長／株式会社デンソー 知的財産部長



昨年7月に就任された小野特許庁長官に、大阪・関西万博出展への想い、
特許庁の取組とJIPAへの期待などについて、山中理事長がインタビューを行った。

大阪・関西万博への想い

山中 今年は大阪・関西万博が開催され、特許庁も出展されるとのことですが、小野長官も大阪ご出身ということで、万博への想いをお聞かせいただければと思います。

小野 特許庁として「社会課題の解決に知財が力になる」ということを発信したいと思っています。特許というと、大企業が独占して利益を得るようなイメージがあるようにも思いますが、大小に関わりなく特許は企業の力になります。国際的にも南北問題という言い方をされたりしますが、そもそも特許は先進国のためだけではなく途上国のためにもなるので、そういう意味では同じ目標に向かって特許が力になるというメッセージを発信したいと考えています。これについてはWIPOのダレン・タン事務局長からも賛同を得ているので、タン事務局長や他国の特許庁長官も招いてそういった議論ができればと思っています。

また、もちろん小さいお子さんもいらっしゃるの、難しい話だけでなく、発明というのは親しみやすく楽しいものだということを経験してもらえたらと思っています。

ちなみに1970年の大阪万博の時代は高度経済成長期で、目指すべきところがある

意味分かっている、いかに安く大量生産するか、という世の中だったと思いますが、今は先が見えなくて試行錯誤しなければいけない、だからこそ知財がしっかり経営を支えなければいけない、という違いがあると思っています。もちろん今の時代がどういう時代なのかは後になってみないと分かりません。ただ、面白い話として、日本で専売特許条例が施行された1885年に開催されたロンドン万国発明品博覧会では、日本の出品に発明品は少なく主に漆器や陶器といった美術工芸品が並べられていました。しかしそれが日本を知らない方には驚愕すべきものとして賞賛され、その後の輸出に結び付き、明治維新の混乱から立ち直ることに繋がっていきまして参考文献「櫻井 孝『ロンドン万国発明品博覧会1885について(1)～(6)』、The Invention、発明推進協会、2023、No.7-12)。当時時代評価や万博の意義などはよく分からないままやっていたものの、思わぬ効果があった訳です。そう考えると今年も一所懸命やっていれば嬉しい誤算のようなものがあるかも知れませんので、とにかく来場される方に楽しんでもらえるようにしたいと思っています。

山中 万博は展示会の一つという面もあり

ますね。今回の出展ではパネル展示のような形でメッセージを出されるのでしょうか。

小野 パネルだけではなく、触れて体験できるようなものも考えています。例えば、ある社会課題に対して、発明者がどう特許を取って頑張ったのかというのを、その場で追体験できるようなことができれば良いと思っています。私自身が行っても面白いものになっていると思いますので、ぜひ奮ってご参加いただきたいと思います。

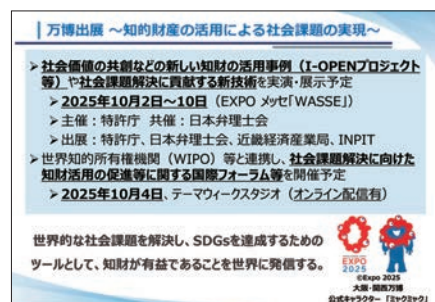


＜詳細はこちら
「特許庁万博特設ページ」

長官就任の抱負

山中 ご経歴を踏まえ、改めて長官就任の抱負をお聞かせください。

小野 まずは基本にある迅速かつ質の高い審査はしっかりやらなければならないと思っています。迅速の方は特許の権利化までの期間が平均期間14か月という目標を達成し、一段落というところですが、現場からは、文献は日に日に増え、外国の文献も読む必要もあり、負担は増える一方という中で、この14か月を維持するのは大変だと聞いています。このため任期付審査官にも来てもらっていますが、それに加えAIを使った審査も取り組んでいかなければと思っており、これだけでも大きな 이슈だと考えています。AIの活用は各国特許庁でも切磋琢磨しており、高みを目指していかなければなりません、先行文献調査については、請求項の記載が似ているものを探すとか、重要度の高いもの



特許庁主催イベント(EXPOメッセ)
メインビジュアル

から並べるとか、結構使っています。昔は経験や記憶に頼っていたところを、AIで文献を探すというのは、とても力になっており、これを高度化することは一所懸命やっていかねばと思います。基本的に特許は文字で書かれていて、AIはこれを読めるので、かなりの可能性があると思いますが、その使いこなしは審査官が頑張らなければと思います。

また、やはり特許は使ってこそということがあるので、審査して登録するところまでだけでなく、しっかり使って経営に役立ててもらふ、という方も特許庁の目標としています。先に述べた通り、今は経営の質が問われる時代で、皆さんもどんどん経営を革新していて、それを知財が支えていくには特許庁も経営目線の話ができなければなりません。それは我々にとってもチャレンジングですが、知財がどう役立っているかが分かって初めて、イノベーションを促進する特許制度を作っていくことができるので、やはりビジネスのことを分かった上でやっていくことが大事だと思います。

また、中小企業やスタートアップはやはり人が不足しているので、その部分は梃子入れしていかなければならないと思っています。昨年INPITの法改正をしましたが、弁理士等とも組んで面で展開して、しっかり支えていくことが大事だと思っています。

日本のマクロ経済を考えたときも、デフレからの脱却や賃金と物価の好循環をと言っていますが、デフレの問題点はデフレマインドだと思います。「価格を上げられないので、イノベーションをして良いものを作っても高く売れない、それならコストカットを…」という状況を脱却していくというのが今の課題だと捉えると、特許を使ったイノベーションの好循環をしっかりとやっていきたいと思っています。

特許制度について

山中 日本企業は今まで価値＝製品そのものですが、価格の構成に製品としてのハードだけではなく知恵を入れる。それが好循環に繋がると思います。中小企業も知恵で稼ぐということが大事になっていて、今後のイノベーションには国全体がそういう方向になるべきと考えます。

小野 まさにそうだと思います。特許制度をしっかり世の中に合わせ、イノベーション



小野特許庁長官(右から5人目)とJIPAからの参加者

を促進するものにしていかなければならないということで、国境を跨いだサービスやAI関連発明といった問題を評価していきたいと思っています。

国境を跨いだサービスについては、特許制度小委員会で議論されています。経済的効果や技術的効果といった要素を法律にどう書くかが難しいところですが、国境を跨ぐ活動の問題はネットワーク関連発明だけでなく、他の色々なものでも起きると考えます。そちらも見えていかなければならないので、頑張りどころだと思っています。

そしてAI関連発明については、AI自体の発明だけでなく、AIの使い方の発明もあり、そちらは当然あらゆる分野のものになります。そこで各審査室にAI関連発明の審査をサポートするAI審査支援チームのメンバーを配置し、このチームの能力も上げていくため、大学等の専門家をAIアドバイザーとして最新の知見を学ぶようにしています。また、審査事例を出すことで予見性を高めるようにしています。各国特許庁とも情報共有しています。

中小企業支援について

山中 中小企業に対する取組について、注力されていることを教えてください。

小野 伴走支援について腰を据えてやっていかなければと思っています。先ほど述べた経営目線で、こういう事業ならこういう知財の使い方が良い等、ビジネス全体を見た上で知財戦略をコンサルティングするようなサービスが日本全国で提供されるようになるのが目標です。モデル事業でスタートして横展開する中で全体の能力が上がっていくのを目指したいです。

山中 経営層への働きかけも大事だと思います。

小野 知財コンサルタントと合わせて経営コンサルタントも派遣するという取組を始めています。また、これはアイデア段階ですが、既に経営層とのルートができている銀

行と組んで知財コンサルティングをするのも一つの手と考えています。いずれにせよ社長の目線に当てていかないと進まないと思います。

知財金融というものもありますが、やはり知財だけで融資は難しく、ビジネスがあつて、それを知財が支えていて、そのビジネスがどれだけお金を生むかということから話が始まるのだと思います。前職の日本政策金融公庫も、まずは社長に困りごとを聞くところから始まります。例えばDXの手伝いをするという話では、いきなりDXと言ってもなぜそれをやるのかという話になりますが、どういうビジネスを考えているのかという話から入れば、それならDXをこう使うと良いという感じで繋がります。知財もそういうことだと思います。

JIPAへの期待

山中 JIPAに対する今後の期待やご要望をお聞かせください。

小野 イノベーションを支える特許制度にしていくために、常にアップデートしていかなければならないので、どういうニーズがあるのか、どういう風に考えているのか、意見交換させていただきたいです。先ほどの国境を跨いだネットワーク関連発明の話も、密に意見をいただいたおかげで議論も煮詰まってきたと思いますので、引き続きお願いします。

また、知財経営についてもJIPA会員の皆さんは、議論が進んでいる企業が多いと思うので、事例を蓄えて、中小企業も含め知財経営の本質を理解して、底上げができたと思います。やはり大企業と中小企業で、知財に対する認識に差があると意見が違ってくると思います。大企業も中小企業も知財をうまく使っている状況になって、初めて制度改正に対する意見が合うので、その意味でも底上げを図っていかなければならないと思います。そして我々も同じ目線でしっかり議論していきたいと思っています。

Japan as No.1, again!

Cool Galapagos as a Competitive Advantage

プログラム

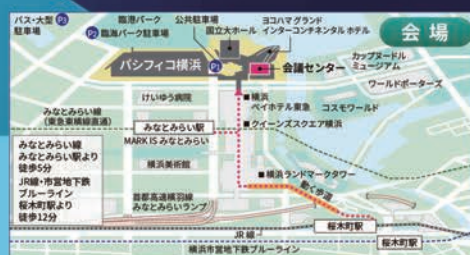
10:00	開会挨拶	JIPA 理事長 山中 昭利 氏 (デンソー)
10:05	来賓挨拶	内閣府知的財産戦略推進事務局長 奈須野 太 氏
10:20	来賓挨拶	特許庁長官 小野 洋太 氏
10:35	来賓講演	ダレン・タン 氏 (世界知的所有機関(WIPO)事務局長) コーディネータ (JIPA副理事長/ 若代 真吾 氏 パナソニック オペレーショナルエクセレンス)
11:15	休憩	
11:25	JIPA専門委員会 委員長座談会	「Cool Galapagos においてJIPA専門委員会が果たす役割 ～専門委員会目線でのAIと知財の分析・業務への活用についての提言～」 コーディネータ 杉村 多恵 氏 (JIPA常務理事/トヨタ自動車) パネリスト (人材育成/パナソニック オペレーショナルエクセレンス) 中田 幹也 氏 パネリスト (意匠/ 日本たばこ産業) 野田 一隆 氏 パネリスト (ライセンス第2/ 日立製作所) 添田 雅人 氏 パネリスト (フェアトレード/ 日本ゼオン) 山口 一喜 氏
12:25	昼食休憩・ポスターセッション	
13:45	特別講演 「NTTの生成AI研究の現状と日本のAI産業の在り方について」	木下 真吾 氏 (日本電信電話株式会社(NTT)執行役員 研究企画部門長)
15:05	休憩・ポスターセッション	
15:30	パネルディスカッション 「イノベーションを起こす知財エコシステム」	コーディネータ 和田 茂己 氏 (JIPA副会長/日本電気Corporate SVP) パネリスト (三菱電機 執行役員) 曾我部 靖志 氏 パネリスト (村田製作所 執行役員) 谷野 能孝 氏 パネリスト (マイクロ波化学 代表取締役CSO) 塚原 保徳 氏 パネリスト (ジャンシン(匠新) 創業者兼CEO) 田中 年一 氏
17:30	閉会挨拶	JIPA シンポジウム実行委員長 中村 麻紀 氏 (JIPA 常務理事/アルプスアルパイン)
18:00	懇談会	会場:ヨコハマ グランド インターコンチネンタルホテル 3階パシフィック 会費:5,000円

2025 **2** WED **12**

10:00～17:35 (開場 9:15)

パシフィコ横浜 会議センター

(開場直後は混雑が予想されますのでご注意ください)



事前登録制/参加費無料

本シンポジウムには事前登録が必要です。
2024年12月12日(木)申込開始
定員1,000名
(後日一部オンデマンド配信あり)



下記URLまたはQRコードよりお申し込み下さい。
<https://www.jipa.or.jp/form/24sympo.html>
(注)定員になり次第締切らせていただきます。

ご注意ください!

- 今回のシンポジウムでは、「開会挨拶」～「パネルディスカッション(前半部分)」迄を後日配信します。
- 「パネルディスカッション(後半部分)」は配信しません。この部分は、リアルのみで本音のトークを繰り広げていただきますので、是非会場にお越しください。